心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ①

※チラシは偶数月の第一月曜日に皆様におとどけしています。

リンドウが教えてくれた愛

私の母は八十五歳になります。父が痴呆になって施設に入ってからは田舎で一人暮らしをしています。昔から健康で体は丈夫なほうでしたが、今は背も腰も曲がり、今年は白内障の手術もしました。

昨年、実家に帰る際、午後1時に帰ると伝えていましたが、思わぬ渋滞につかまり、到着が1時間ほど遅れそうになりました。遅れることを伝えようと実家に電話をかけましたが出ません。

いよいよ実家に着くと先に帰っていた妹夫婦も2時間前に着いたが姿が見えないとの話でした。**母は耳も遠く、白内障を治す前でしたので、何だかいやな予感がしてきました。**

不安と苛立ちの中、近所を探し回ること15分ほど。

先の角を曲がって一輪車を押して笑顔で歩いて来るおばあさんを見つけました。

…母でした。

私は大声で母を呼びましたが、耳が遠いせいもあり、聞こえていないようでした。

ほっとしたのと同時に、にこにこしながら呑気に帰ってくる母にだんだん腹が立ってきて、

「もうっ!!心配したんだから!?今日帰ると言ったのに!!」と怒ってしまいました。

母は怒っている私に気がつき、何とも言えない申し訳なさそうな顔をしていました。

その夜、食卓に綺麗なりんどうの花が花瓶に飾られていました。戦争から戻り貧しかった父が母にプロポーズの時、とても指輪を買えず贈ったのがりんどうの花だと聞いた事があり、秋にはいつも、父の育てたりんどうの花が食卓を彩っていました。

翌朝から父の施設へ皆で行く予定にしていましたから、きっと父と私たちの為に摘みに行ってくれたのだろうと、その時やっと気がつきました。

母は近所の方に教わって初めて育て、1週間前から毎日朝晩手入れに通ってくれたそうです。

そのりんどうの花を摘んで猫車いっぱいに帰ってきてくれたにもかかわらず、そのりんどうの花にすら気づかなかった自分がとても恥ずかしくなりました。

恥ずかしいのと、情けないのと母の想いを感じると涙が今にもこぼれそうになるのをこらえるのが精一杯でした。

来年は母と一緒にりんどうの花を育てたいと思っています。

二〇一二年・夏

たはむれに母を背負いて
そのあまり軽きに泣きて三歩あゆまず　　石川啄木

自分も大人になったので、母を背負うのなんて簡単だと、冗談を言いながら母を背負ってみると、その軽さに驚き、母にかけた苦労、また、いまだに苦労をかけているかと思うと涙があふれてきて三歩も背負って歩くことができなかったという解釈でしょうか。
いつまで経っても子供の心配をするのが親子の情というものです。子を想う親の心を想い返し、自分を見つめなおしたいものですね。

あなたの町のアーバンホール
葬儀・法要・ギフト
アーバンホール